

歴史館だより

財団法人最上義光歴史館 Vol.4 平成9年3月発行



桜花らんまんの山形城東大手門櫓

温故知新



財団法人最上義光歴史館
理事長・山形市助役

山口 寿 男

昨年は最上義光公生誕四百五十年の記念すべき年でした。皆様方のご協力により、各種のイベントが大成功裡に終了いたしましたことに、まづもってお礼を申し上げます。

戦乱の時代から泰平の世へと移り変わる歴史の大転換期に生きた義光公は、未来に対する確かな洞察に立って、山形のあるべき姿を思い描いていたに違いありません。義光公を単なる過去の武人として見るだけでなく、学ぶべき点が多々あるように思われます。

城下町づくり、新田開発、殖産興業、最上川舟運の整備、上方文化の移入等々いずれも未来志向の業績であります。

「温故知新」は使い古された言葉ですが、二十一世紀を目前にひかえた今、あらためて歴史を顧み、未来の山形市民に何を残すべきかを、皆様と共に学び、考えたいと存じます。

より多くの方々に親しまれる歴史館にするために、時宜を得た企画を進めておりますので、皆様の一層のご支援をお願いいたします。

最上義光の宗教政策

山形県地域史研究協議会常任理事 北 畠 教 爾

山寺立石寺

永禄十三年（一五七〇）、義光は、「私の本懐を達せしめたならば、山中には決して他宗のものを居住せしめない」と記した祈願状を立石寺に納めた。「義光」の名で書かれた最初の文書で、義光二十五才の時のものである。

文中「本懐」とは、家督相続のことと考えられている。立石寺は大永元年（一五二二）、戦乱で焼打ちにあり壊滅的打撃をこうむった。この焼跡に堂社を復興したのは、幼少だった父最上義守とその一族でもあったが、より実際に活動したのは、じつに多くの勸進聖たちであった。聖は広く村々を訪れ、納骨や寺塔



参詣者で賑わう立石寺中堂

造営の勸進をしながら、やがて完成した堂社に住みついたりして、立石寺内で大きい勢力になってきていた。六十六部聖・高野聖・念佛聖など多くの痕跡が記録に残されている。この文書の背景には、このような事情があったのである。

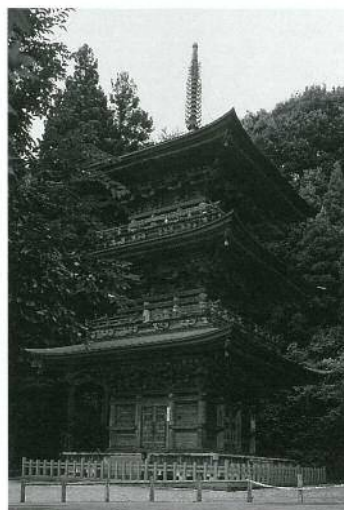
義光が立石寺院主・別当であった威徳院に他宗排斥を約束したことは、近世的宗教統制のいとぐちを作ったもので、中世的な寺院のありように幕を引くものであった。

現在の立石寺中堂は、慶長十三年（一六〇八）、義光による大修理当時の形式を残している。大檀那義光による大修理復興事業は、多数の勸進聖たちによる中世的な造営事業の終末を告げるものであった。

慈恩寺の復興

十六世紀初めの永正の兵乱で本堂をはじめ諸堂社を消失した寒河江の慈恩寺も、義光によって再興された。義光による一山復興は、慶長十三年（一六〇八）の三重塔の落成が最初である。

現在の本堂は義光の没後、元和四年（一六一八）義俊のときに完成し



慈恩寺三重塔

た。舞楽奉納の楽屋をかねる山門は、最上家改易後の寛永十三年であったが、氏家外記が寄進した不動堂なども含めて、近世慈恩寺の荘厳は、最上義光の発願によるものであった。

寺社統制のさきがけ

周知のごとく専称寺は、愛娘駒姫の菩提を弔うため高掬から山形へ移建された寺院で、広大な敷地と十三か寺の寺内塔頭が配置されて寺内町がつくられた。そして領内のすべての真宗寺院を専称寺の末寺として、領内の門徒に封建的統制を加えやすくしたのである。

長子義康の非業の死をいたむ親心は、山形常念寺をその菩提寺とし、鶴岡にも常念寺をおこして、その菩提を弔った。後陽成天皇が常念寺に勅額を下賜したのを契機として、出羽国の浄土宗寺院を常念寺の統制のもとにおくようにした。

義光は諸大名にさきがけて、江戸時代における寺院統制の原形をつくりあげていたのである。

義光の信仰

義光の寺領寄進や保護をしめす史料や伝承をのぞく寺社は、全県下に分布する。「最上義光分限帳全」には、庄内五二か所を含めて一〇九か所の寺社について一万三千石に及ぶ寺社領が記されている。

ところで義光が保護を加えた寺社は、特定の宗派にかたよっていない。このことは義光個人の信仰からでたというよりも、戦国時代の人々の心を収攬するための戦略、あるいは治政のために利用したと考えられるむきが強い。

たしかにはじめにみた若い時の立石寺文書からはじまって、宗教をとおして領内の統治を考えるするどい感覚は、すぐれた政治家としての義光をうかがわせるに十分である。

しかし義光がかかわった多くの寺社、すなわち祖兼頼にかかわる光明寺、最上家歴代の禅刹、平安時代の旧仏教、立石寺・若松寺・慈恩寺・羽黒山等、晩年の念佛信仰への傾斜、神社の数々など、非情な戦国時代を駆け抜けなければならなかった義光の、その時々々の敬虔な心情をうかがえるように思えるのである。

山形の文化を考えるうえで、義光の残した事績はあまりにも大きい。

最上義光と庄内

酒田市立琢成小学校長 井川 一良

庄内仕置の拠点

庄内では、戦国時代末から大山の武藤氏と、庄内進出をねらう越後の上杉氏・山形最上氏の間で戦闘が繰り返されてきた。関ヶ原の戦いの代理戦争として、石田ラインの上杉氏、徳川ラインの最上氏の戦闘は、東軍勝利によって最上方に有利に展開し、慶長六年（一六〇一）庄内は最上領となった。

最上氏にとって庄内領有の意義は、一に山形と上方を結ぶ流通拠点酒田を掌握したこと、二に武力維持に必要な兵糧としての米、馬糧としての大豆を確保したこと、三に民衆生活の必需品である塩を、自前で確保できる目途がついたことであった。義光はこのことを中心に、庄内の領国経営にあたった。

最上義光「分限帳」によれば、領内の城地は二五か所あり、その多くは内陸で庄内には大山・鶴岡・亀崎の三城を配置した。元和八年（一六二二）の改易時には、この三城に加えて松根城が接収の対象となっていたことから、この四城が城として機能し、庄内仕置の拠点となっていたことになる。庄内には戦国時代から

多くの城館があり、土豪が立てこもり抵抗したためその拠点を廃し、統治しやすくする方策をとったと考えられる。

酒田湊の仕置

最上氏が庄内を領有したことは、上方との間に直接海の道が開かれたことになり、大きな意義があった。義光は、信長や秀吉が泉州堺の商人に命じたように、酒田の商人を通して川と海の仕置をおこなった。

粕谷源次郎は、最上氏の庄内領有前から最上氏の御用商人で、二木・伊勢崎らの湊町商人と共に、義光の依頼で酒田に集められた内陸の年貢米を、持船四艘で上方に回漕していた。粕谷は豊臣秀吉の小田原征討後の天正十八年（一五九〇）八月、五奉行から海上船舶の監視役を命じられ、さらに東国三三か国警備のため焼印札を受けるほどの代官的豪商であった。

永田勘十郎は、漁村年貢の徴収と酒田に出入りする商船の移出入品に課税する駒口銭の徴収を請負った。永田は、最上氏改易の年までその役割を担い、徴収した役銀を亀崎城代

進藤但馬守を通して山形に送った。

兵糧の米と馬糧の大豆

慶長十六年（一六一一）から翌年にかけて、義光は庄内と由利郡の新拝領地に限って検地を実施し、平均二〇パーセントの改出しをした。現実に米を生産する田の年貢は米で、米を現実に生産しない畑からは、村によって米と大豆を徴収した。

この頃の畑の作付は麦類を中心に多様であったが、生産の有無にかかわらずあえて米と大豆を納入させたことには理由があった。この頃、日本の経済は自然経済的条件にあったことと、秀吉や家康の天下統一を含めて最上氏領国にあっても、武力の維持確保がその背景にあった。強力な家臣団を養う膨大な兵糧と馬糧としての大豆は不可欠であった。しかし、米と大豆を緊急時に対応できるように、戦略拠点に散在させておくこ



最上氏の慶長16年一条八幡神田の検地帳

とが重要であった。義光が新拝領地の検地で畑年貢を米と大豆にした理由はここにあり、用水堰の開削と新田開発もその延長線上にあった。

塩の差配

諸外国とは異なり日本では、海水から塩を生産していた。そのため、内陸の大名にとって領民を治めるために、塩の生産と流通路の確保は必須の条件であった。

義光は庄内と由利郡を領有すると同時に、塩の増産を命じた。海水は無尽蔵であったから、塩釜や塩桶、それに小屋などの施設や道具を除けば、海水を煮つめる塩木は唯一の原料であった。義光は塩業奨励策の一つとして入会地の慣行に従いながら、塩木の伐採と保護を命じた。特に塩業村に近い砂丘地の森林面積は狭かったため、不足分は出羽山地から供給させた。

また、塩木の供給を担当する鋸役のこぎりを設け、酒田の豪商粕谷に委ねた。このようにして生産された塩は、川舟で内陸に送られた。

義光にとって庄内は、領国経営に必要な塩・米・大豆の確保と、遠く上方との直接交流が可能になったという意味で、大きな意義があったといえよう。

最上義光公 生誕四五〇年



パーティーでの最上家当主ご挨拶(於 山形ランドホテル)

「最上義光公を
讃えるつどい」
9月29日
最上家47代 最上公義氏を
迎えて盛大に開催。



史跡探訪(山形城本丸発掘現場)



史跡探訪(長谷堂 清源寺)



特別講話／10月19日 「最上氏時代の山形城下」
〈講師は山形二小の高橋信敬教頭〉



こども講座／10月26日 双葉公園(三の丸跡)にて
〈41人の小中学生が市内の社会科の先生方と〉

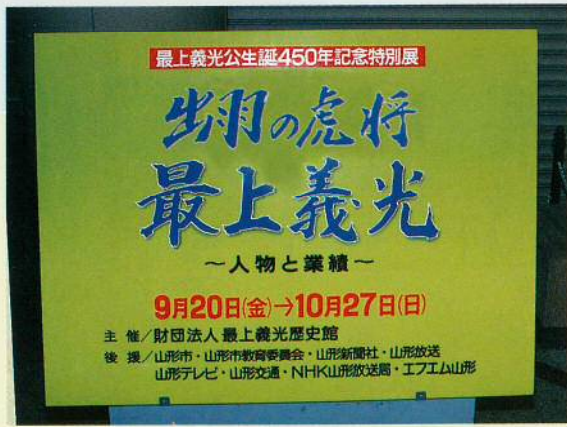


秋の夜、幽玄な薪能



山形城の薬城だ、ソレーツ。(大石曳き)

特別企画展
 「出羽の虎将最上義光
 ……その人物と業績」
 9月20日～10月27日



館入り口の案内パネル



展示状況：正面は力強い義光公の筆跡



熱心に見学してくださる方々

山形市内各種団体や組織が企画し、多彩な記念イベントが華やかに開催されました。ここでは、歴史館がかかわったものを中心に、写真でご紹介いたします。



外国のお客さまも“oh wonderful!!”
 オーストラリアの姉妹都市スワンヒルから/7月1日



歴史講座/2月(毎日曜日)
 「最上義光の連歌を読み味わう」
 〈講師は山大教育学部名子喜久雄助教授〉

生誕450年記念
 秋まつり
 9月28・29日



野点の席も大にぎわい



可愛らしい稚児行列

外交家としての最上義光

県立山形東高等学校教諭 菅田慶信

最上義光が戦国の世の典型的な外交家であったことは、つとに有名である。天正二年（一五七四）、中野義時との家督争いに勝利し、領国を現在の村山から新庄、庄内平野へと拡大していく上で、義光の前に大きく立ちはだかったのが、奥羽最大の戦国大名伊達政宗であった。庄内平野に進撃し、武藤義興らの庄内勢を屈服させるためには、政宗の軍勢力が脅威だったのである。そこで義光は、政宗と対立していた佐竹・蘆名・大崎・相馬の武将たちと大連合を組み、いわば伊達包囲網をつくり出して、庄内への伊達の援軍を封じ込めようとしたのである。

外交家としての義光は、「中央」の政治的権威にも敏感だった。「力」によって獲得した「紛争の調停者」としての地位は、より強大な権威によって保証されてこそ、逆に周辺の武将に対する「威圧」となったからである。天正二年、弟中野義時との家督争いに勝利した義光は、「中央」との関係をつなぐべき重大な局面に立たされることになった。翌年三月、長篠の合戦における大勝。八月、越前の一方向一揆の壊滅という状況下、「天下布武」の威容を鮮烈に人々に印象付けた織田信長は、岐阜城を嫡子織田信忠に譲り、壮大な安土城を築城していくとともに、鷹師を奥羽

に派遣して鷹を求めてきた。

鷹の献上は、新しい統一政権の秩序の中で、自己の領国支配の正当性を主張できることにつながる。奥羽の武将たちは、この「中央」政権との外交関係樹立に奔走する。同年、伊達輝宗が馬と鷹を信長に献上したのかわきりに、天正五年（一五七七）には、谷地の白鳥長久が信長に馬を献上しており、先を越されて驚愕した義光も志村伊豆守を安土に遣わし、最上家系図と白の大鷹と馬一疋を献上したという。志村は豪壮な安土城を見て、いかなる思いだったろうか。最上義光が信長の推挙をうけて、朝廷より出羽守の官途をえたのは、この天正五年の時と考える。義光の領国拡大は、村山「地方」の個別的な城盗りではなく、「中央」との関係を持ちつつ、急速に発展していくこととなる。

さて北奥羽最大の戦国大名安藤愛季も、津軽南部宮内少輔を天正二年に上洛させ、天正五年に従五位下に任命されて、男鹿半島の脇本に安土城を模しつつ壮大な城をつくり、安藤氏一門や重臣を集住させていた。「日の本將軍」の名をほしいままにし、

中世国家における北海道からサハリン・北東アジアの異民族支配に深くかわって来た最大の「海の領主」安藤氏と最上義光との関係については、従来あまり注目されなかった。

両者の外交関係の一例として、天正十年（一五八二）の安藤愛季宛て義

光書状をあげることができる。義光は、愛季に、寒河江の白岩氏が大宝寺義氏に内通したのでそれを鎮圧したこと、来春には清水・鮭延氏とともに庄内に攻め込むので、同時に攻撃するよう要請している。当時、義氏も津軽の大浦為信と結んで由利地方へ進軍し、安藤愛季を挟撃しようとしていた。

義光は、砂越城主砂越也足軒の娘が安藤愛季の正妻となっていること、也足軒の子息の砂越勝兵衛が脇本城に居住していることを利用して、愛季とコンタクトをとっていった。義氏が前森蔵人の軍によって居城尾浦城が包囲された天正十一年、安藤愛季の率いる軍勢によって、鳥海山の麓で庄内軍は壊滅的打撃をうけており、それが、義氏の横死の遠因と考える。その後、義興が大宝寺の家督を継承するが、義光の傀儡だったとされている。義光は、比較的勞せずして庄内をひとまず掌中におさめたかのように見えるが、実は、安藤氏の多分なる「助成」のもとで達成しえたのであった。そして、砂上の「平和」は、一年も続かなかった。

ともあれ「海の領主」安藤氏との関係にいち早く注目しつつ、天正二年からわずか九年で日本海への入口を獲得した義光は、やがて最上川舟運を開くこととなるのである。戦国の世の「外交家」義光の目は、南奥羽・「中央」とともに、北の日本海にも向いていたのである。

大正10年(1582)ころの奥羽の武将配置図(北日本)



山形賛歌

井上 伶子

山形城址を取り囲む堀の水面に、淡紅色の可憐な桜の花びらが風に吹かれて散り落ちる様を眺めながら、戦国時代に堀の向こう側で武将や女性たちがどのような生活をしてきたのかなど、山形の歴史に興味と好奇心をいだいて散策するのが私は好きです。

そのような折、最上義光生誕四百五十年の記念事業の一つとして、歴史館で「最上義光とその時代」と題した講座があることを知り受講いたしました。

三回にわたった講座が終了したとき、三十余名の受講者全員から、このままこの集いを続け是非勉強したいという声があがりました。皆さんのご意見で、会の名称を「女性歴史サークル・やまがた」として発足しました。

現在会員五十余名となり、山形の歴史や日本の歴史を学んだり、旧跡等を尋ね歩いてりしながら、女性の目から見て学ぶ歴史の会として歩んでおります。

活動の例としては、平成八

年五月に、「深緑の最上川舟下り」と題し、講師に板垣英夫氏（村山市史編纂委員）を迎え、村山地方の歴史を学び、

そのあと、基点、三ヶ瀬、隼の「最上川三難所舟下り」を深緑に包まれながら実現しました。山形県内だけを流れて海に入る母なる最上川。その昔、この川を紅餅・米などを積んだ舟が行き交う様や、京文化との交流などに思いを馳せ、山形の大切な宝だという思いに胸が熱くなりました。

九月には「専称寺を訪ねて」と題し、山形東高校教諭の菅田慶信氏と共に駒姫の墓前を訪れました。駒姫は最上義光の愛娘で、美しい女性として名が高かったそうです。豊臣秀吉の後を継いで閑白となつ

た秀次に望まれ嫁ぎましたが、秀次は謀反を企んだという疑いをかけられ、秀吉によって切腹させられてしまいました。駒姫はじめ仕えていた女性たち三十数名が京の町を引き回されたあげく、三条河原で打首になるという悲しい出来事が起こったのは四百年前の夏の日のことだったそうです。

わずか十五歳で短い生涯を閉じた駒姫が哀れであり、義光公の嘆き悲しみはいかばかりだったかと思うと胸が痛みます。

駒姫の墓は専称寺の奥まった所で竹藪にひっそりと囲まれ、訪れる人も今はあまりないということですが。墓に積もった枯葉を手で取り除き、自分の娘だったらどんな思いだったろうかと当時が偲ばれ、にわかに歴史が身近なものとして感じられました。

会員みんなで一束の花を墓前に手向けてまいりました。私の歴史への興味は、義光公に殉死した四人の家臣の一人である長岡但馬守が亡母の先祖であることを聞き、何故殉死したのか、何故生き残って最上家再建を計ろうとしたのかなど、その時代の人物たちと対話し話してみた



最上川：義光が開削した基点付近

短歌

古戦場

山麓短歌会代表

結城晋作

慶長五年直江兼続が布陣せし 菅沢山に住宅の植音ひびく

九月十三夜の餅食いはぐれ逃げしとう 上杉軍の夜討ちに遭いて

知持志村伊豆守の死守したる 長谷堂城址のすがた変らず

亀の伏す姿に似たる城山を 朝夕仰ぎ子ら育ち来ぬ

城山の頂に立ち見はるかす 山形城址の杉杜かすむ



菅沢山と村の木屋敷の古戦場

いなどと思ったりしたことから始まりました。

幾多の先人達が残してくれた遺産の数々、文化財、歴史伝承などを大切にしてゆかなければと思います。私たちの一歩一歩も確かに歴史を刻むのですから、その一歩を大切にこの地に残すように心がけたいものです。

山と水と緑の三要素を兼ね備えた美しい山形を私は誇りと思い、心から賛美したいと思います。

（女性歴史サークル・やまがた）

平成9年度の計画

本年度は、最上義光公生誕四五〇年を記念して、当歴史館を中心
に市当局や関係団体と連携して、
多彩な催しを開催いたしました。
お陰様で、多くの方々から大変
なご好評をいただきました。

平成九年度は、最上家の基礎的
な調査研究に重点をおき、資料整
理を進めるとともに、歴史講座等
にもさらに工夫を重ねていきたく
と考えています。

第10回「ねんりんびつく」につ
いても、山形を訪れてくださるお
客さまによるこんでいたいただけ
るようなアイデアを具体化してい
ます。

特別企画展

「最上時代の面影を探る」

最上家がここ山形を去ってから
およそ三〇八年がたちました。そ
の時代の面影は次第に姿を消し、
今ではほんの僅かに残るだけとな
りました。

この度の展覧会では、それらの
面影を写真やその他の資料によっ
て紹介します。
(平成九年九月中旬開催予定)

歴史講座

山形の歴史や、山形に残るすく
れた文化財について、広く学ん
でいただけるよう、企画を練って
おきます。

山形市以外での移動講座も検討
中です。

詳細は、「広報やまがた」や関係

市町の広報紙で後日おしらせいた
します。

こども講座

こどもたちの郷土の歴史に対す
る関心と理解を深めるため、今年
も社会科学の先生方のご協力をい
たでいて開催いたします。
(平成九年十月開講予定)

最上氏関係資料調査

これまで調査してきたことなど
も含めて、さらに深く調査研究を
行ないます。

また、最上氏研究の基礎的な史
料として、広く一般に活用して
いただけるよう「最上時代史料集成
(仮題)」の編集を継続事業とし
て行ないます。

「お願い」

「最上家に係わるものをお持ちの方
最上に係わる資料を」存じの方
「一報ください。」

最上時代の歴史や文化を知るた
めの資料を探しております。

今後の研究に役立てたいと思
います。よろしくご協力ください。

連絡先

財団法人最上義光歴史館事務局
〒990 山形市大手町1-53

TEL 25-7101
FAX 25-7102

新収蔵品の紹介

紙本金地著色
「葡萄図屏風」 一隻



このたび、義光公の菩提寺光
禅寺から義光公寄進と伝える屏
風が寄託されました。

現在は一隻だけですが、も
とは一雙の屏風で、光禅寺が火災
に遭ったときに片方は消失して
しまいました。

片隻だけのため全体の構図は
わかりませんが、屏の内と外か
ら葡萄の幹を伸びやかに描き、
金を贅沢に敷いた中に、棚に茂
る生き生きとした葉とたわわに
実った葡萄を配しています。

義光公時代の山形の文化をい
まに伝える貴重な資料であると
ともに、葡萄の産地山形にふさ
わしい題材といえましよう。

平成8年度のあゆみ

4月20日	最上義光公生誕四五〇年記念春まつり「霞城観桜会」無料開館(延入館者 八二二名)
5月28日	平成八年度第一回・第二回理事会
6月9日	平成八年度第三回理事会
6月16日	「最上義光公生誕四五〇年記念山形市中学生写生大会」後援
7月1日	「最上氏時代山形城下絵図」「義光物語上・中・下」「最上家中分限帳」収蔵
7月2日	スワンヒル市交換留学生三五名来館
8月31日まで	「山形市民無料招待」
8月6日	「山形市民無料招待」
8月30日	「山形市民無料招待」
9月20日	市制施行一〇七周年記念無料開館(入館者 三〇四名)
9月29日	「最上義光公生誕四五〇年記念特別展「出羽の虎将・最上義光」人物と業績」開催(会期10月27日まで 延入館者 八、八七〇名)
9月25日	特別講話 10月19日「最上氏時代の山形城下」
10月25日	「山形城杉板戸」二点を名古屋城へ貸出
10月26日	「最上義光公生誕四五〇年記念「最上義光公を讃えることば」(参加者 一一四名)
10月26日	「最上義光祭」無料開館(入館者 五、二六四名)
11月3日	平成八年度資料整備検討委員会
11月3日	「最上氏時代」の史跡をめぐろう(参加者 四一名)
11月3日	文化の日 無料開館(入館者 二七三名)
11月27日	光禅寺より「葡萄図屏風」寄託
1月28日	平成八年度第二回評議員会
2月2日	平成八年度第三回理事会
3月1日	「歴史講座」最上義光の連歌を読みわらう(9日・16日・23日計三日)
3月1日	光明寺より「慶長五年義光外連歌懐紙」寄託

ご利用について

- 開館時間 ●午前9:00から午後4:30
- 入館料 ●一般大人300円 高校生200円 小・中学生100円 団体大人240円 高校生160円 小・中学生80円
- 休館日 ●月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)
- 交通 ●JR山形駅より徒歩約10分 大手町バス停留所より徒歩1分
- 山形市大手町1-53
- TEL 0236-257101
- FAX 0236-257102